

第26回 歴史リレー講座「百済滅亡と高安城建城」 菅谷 文則氏（H28.11.20）

かつて朝鮮半島に存在した3つの国の成立時期には諸説ありますが、亡びた時期は660年の百済が一番早く、次いで高句麗、新羅です。天智2年（663）、^{はくすきのえ}白村江の戦い当時の地図を見ると、百済は東の新羅と海を隔てた唐に挟まれています。百済からの使者の要請で日本軍が駆け付けた時点で百済はすでに滅亡しており、日本・百済連合軍は大敗を喫しました。その後、新羅は唐さえも制御できないほど勢力を増大させます。

私は、大和の高安城が仮想敵国である唐と新羅から日本を守るための軍事拠点として深く関わっていたと考えています。さらには、王寺の明神山周辺が国防や外交の最重要地点だったのではないかでしょうか。

高安城の工事が始まったのは天智8年。設計・監督は百済人技術者が担当しました。さらに、九州、瀬戸内海経由の侵攻を想定して、福岡の博多に数kmにわたる水城（土手）を、長崎の対馬には高い石垣を備えた金田城を、香川の高松には屋嶋城を築きました。現在これらの遺跡は観光名所となっています。一方、大和盆地には竜田山（三郷町）と逢坂山（香芝市）に閣を造りましたが、遺跡は見つかっていません。

かつて八尾の研究者たちが10年の歳月をかけて大阪の高安山で高安城跡の調査を実施しました。そして、三郷町と平群町の間（高安山の真裏）で城の倉庫跡を発見するも調査の結果、奈良時代の物と判明しました。実際、大仏開眼の直前に聖武天皇はこの倉庫を確認しに高安山を訪れたようです。新羅の皇子が8艘の船で絹織物、綵通、象牙、香料などを携え大宰府に上陸した際、これを襲来ではないかと危惧したためと思われます。天皇の心配は杞憂で、皇子らが難波津で荷卸した貴重な品を求めて都から貴族が殺到したといいます。その後、大和川を遡って平城宮に辿りついた皇子らは丁重に迎えられました。

では、高安城は具体的にどの辺りにあったのか。ここで再び明神山です。山頂からは大和盆地はもちろん、遠くは播磨、淡路、山城、伊勢、紀伊まで見渡せます。当然、瀬戸内海から大和川を遡る敵船もいち早く発見できるはずです。大和川は現在、堺へ流れていますが、江戸時代までは柏原の石川と合流して北へ向かったのち河内湖（現在の守口市周辺）へ流れていきました。唐や新羅は四天王寺がある上町台地から河内湖へ侵入してくる恐れがあります。ところが、明神山から上町台地を一望できるため、狼煙（昼用は黒い煙、夜用は炎）を活用した都への素早い情報伝達が可能です。これこそが軍事・防衛の好適地である明神山と高安城の深いかかわりを示す事実ではないでしょうか。したがって、これまで通説となっていた高安城の場所を構築し直してみる必要がありそうです。

さらに、高安山、信貴山あたりは山の上まで農地が広がっていることから、高安城の兵隊は農地開拓も兼任する屯田兵だったと考えられます。なかでも平群町信貴畑には今で言う軍人用キャンプがあり、戦いに備えたと思われます。仮想敵国が攻めてきた場合、大和川の流れがうねり、川幅が狭くなる龜の瀬から上流辺りが最も警戒を要する地帯でしょう。高安城遺跡を探すとすればまさにこのあたりです。

信貴山には兵営があり、眺望抜群の明神山には見張り台が設置されていたはずです。仮に明神山の谷の一部で土器が出土されれば、軍事地帯が局所的なものではなく大和川を挟む南北の山々一帯に及んでいた証明になります。高安城の最重要業務は大和川を遡ってくるであろう敵船を監視することでした。ですから、大和川と石川が合流する柏原の国分にも何らかの軍事施設があった可能性があります。

結論を言いますと、王寺町、三郷町、平群町、柏原市を中心とする大和川を挟む南北の山々には大規模な防衛施設が点在していたのではないでしょうか。高安城は、いわゆる石垣を持つ城ではありません。その場所はどこだったのか。そろそろ、その所在地を大阪の高安山だけに求めることをあらため、軍事国防を統括する広域地帯として扱うべきだと私は考えています。

百濟滅亡と
高安城建城

奈良県立橿原考古学研究所 菅谷文則

管谷文則

时间 2016-08-08

り、新年の、さいづの申上ひだり。
この年の暮年自となつた。飛鳥時代から奈良時代に至るまで外國人は、名前を判明してゐるのみで、もとより余人としていたのである。その全てのいふるに、その全てが結ぶる所は、むしろ10年やむかきことなる。もちろん理解されねば困ることなし。
6世紀後半から7世紀末までの飛鳥・奈良時代における新羅の軍事は、中央大敵である新羅軍が、すべて山道沿を通り、西海方面を進めて、大和、坐り奈良県に至つていた。7世紀末になって東夷した渤海倭船は、日本海の秋田から山口県まで

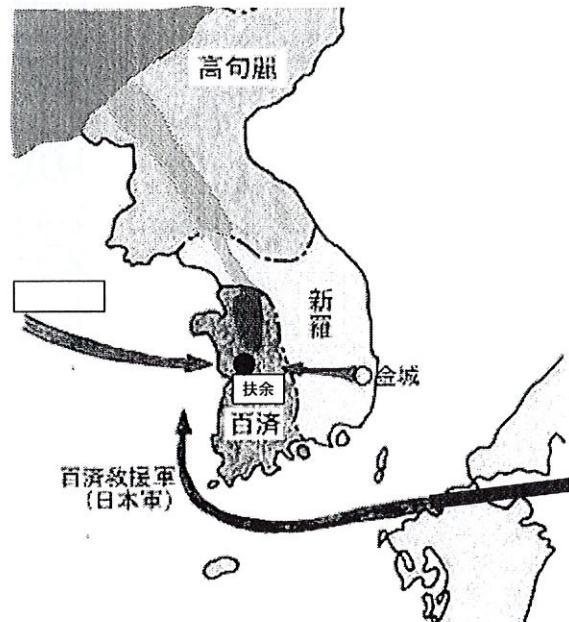
「あべのルカス」
この少年外国人の往来
が「目で認識出来る場所」
ある。
王等前の大神山山頂に立
つて、胸内をかならぬ則
石垣の間を眺め。また
大神山からの内平野が、また
で見る。奥の坂原の坂原川近
くまでの沿岸は、見る見る
また、天保・五歳代の高
安積も、天保・五歳代の高
は現在地名で、成城である
ので、古の坂原川の河口付
て書かれりといひある。曰
木古川には「能郷坂原」
と云ふ。坂原を最も多くする
外往来を最も多くするはず
らしいスポットである
で、「遊行」がこれでは思ひ

明神山人の往来見守る

奈良と
外国の
文化

宮谷文則、県立畠原考古学研究所所長の海岸に到着したので、益外から来連した船の係留場、京都府立農産物販賣場は、古墳時代では大津瀬浦の西岸が多かったと推定し、は、御津御寺の北の地区で、た。外船頭の港、つまり海へいるが、奈良時代では、港に棲んでいた官舎である。

白村江の戦



日本書紀 齊明天皇

齊明天皇

是歲、百濟の為に、將に新羅を伐たむと欲して、乃ち駿河国に勅して船を造らしむ。已に訖りて、續麻郊に挽き至る時に、其の船、夜中に故を無くして、艦舳相反れり。衆終に敗れむことを知りぬ。科野国言さく、「蠅群れて西に向ひて、互坂を飛び踰ゆ。大きさ十圍許。高さ蒼天に至れり」とまうす。或いは、救軍の敗績れむ怪といふことを知る。

齊明天皇

五月の乙未の朔癸卯に、天皇、朝倉橋廣庭宮に還りて居ます
秋七月の甲子の朔丁巳に、天皇朝倉宮に崩りました。

日本書紀 天智天皇紀

又、日本の、高麗を救ふ軍将等、百濟の加巴利濱に泊まりて火を燃く。灰變り孔に為りて、細き響有り。鳴鏑の如し。或の曰はく、「高麗・百濟の終に亡びむ徵か」といふ。

是の月。唐人・新羅人、高麗に伐ちき。高麗、救を国家に乞へり。依りて軍将を遣して、疏留城にいらしむ。是に由りて、唐人、其の南の塚を略むこと得ず、新羅、其の西の壘を輸すこと獲ず。

五月に、大將軍大錦中阿曇比邏夫連等、船師一百七十艘を率て、豊璋等を百濟國に送りて、宣勅して、豊璋等を以て其の位を継がしむ。又金策を福信に予ひて、其の背を撫でて、褒めて爵祿賜ふ。時に、豊璋等と福信と、稽首みて勅を受け、衆為に涕を流す。

是歲、百濟を救はむが為に、兵甲を修繕め、船舶を備へ、軍の糧を儲設く。是歲、太歲壬戌。

(二年)

是の月に、佐平福信、唐の俘続守言等を上げ送る。

(三年)

前將軍上毛野君稚子・間人連大蓋、中將軍巨勢神前譯語・三輪君根麻呂・後將軍阿倍引田臣比邏夫・大宅臣鎌柄を遣して、一二萬七千人を率て、新羅を打たしむ。

日本書紀 天智天皇紀

(天智四年)

對馬嶋・壹岐嶋・筑紫國等に防と烽とを置く。又筑紫に水城を築く。

(天智六年)

長門國に築城、筑紫國に大野・豫の二城を築く。

(天智八年)

倭國に高安城、讃吉國山田郡に屋嶋城、對馬國に金田城を築く。

(天智九年)

天皇、高安嶺に登る。高安城の工事を一時中断。高安城修理、畿内の田税を収む。

(天智十年)

高安城修理、穀と鹽を積む。又長門城一つ。筑紫城二つを築く。

(達率谷那晋首(兵法博士)らに叙位。
※この人物は、築城に功績があつた。

日本書紀 天武紀

(天武元年)

近江軍、高安城の税倉を焼く。三尾城を攻める。

(天武四年)

天皇、高安嶺に登る。高安城に幸す。兵政官の創設。諸王有位者への武器の装備を指示。

(天武五年)

京・畿内の武器を調査

(天武八年)

文武官僚に対する兵器・馬の検閲を指示。竜田山、大坂山に閻を置き、難波に羅城を築く。

(天武十二年)

※議論が多い
陣法の教習を指示。

(天武十三年)

天武天皇の詔「政治の要是軍事である」文武官人に兵馬を整えさせる。

(天武十四年)

軍団装備用の兵器の私藏を禁じ、郡家に収める。

(持統三年)

筑紫に石上麻呂らを遣し、新城を視察させる。天皇、高安城に幸す。兵士は國ごとに壯丁の四分の一に推定し、武術を習わせよ。

(持統九年)

諸国に陣法博士を派遣し、兵法を教習させる。

日本書紀 又武紀

(文武二年) 大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を修理させる。高安城修理。

(文武三年) 大宰府に三野・稻積の二城を修理させる。高安城修理。

(文武四年) 皇族・臣下や畿内に武器を装備するよう指示。筑紫總領、周防總領、吉備總領ら任命。

(大宝元年) 大宝律令施行。高安城廃し、貯蔵物を大和と河内に移す。衛士増員。

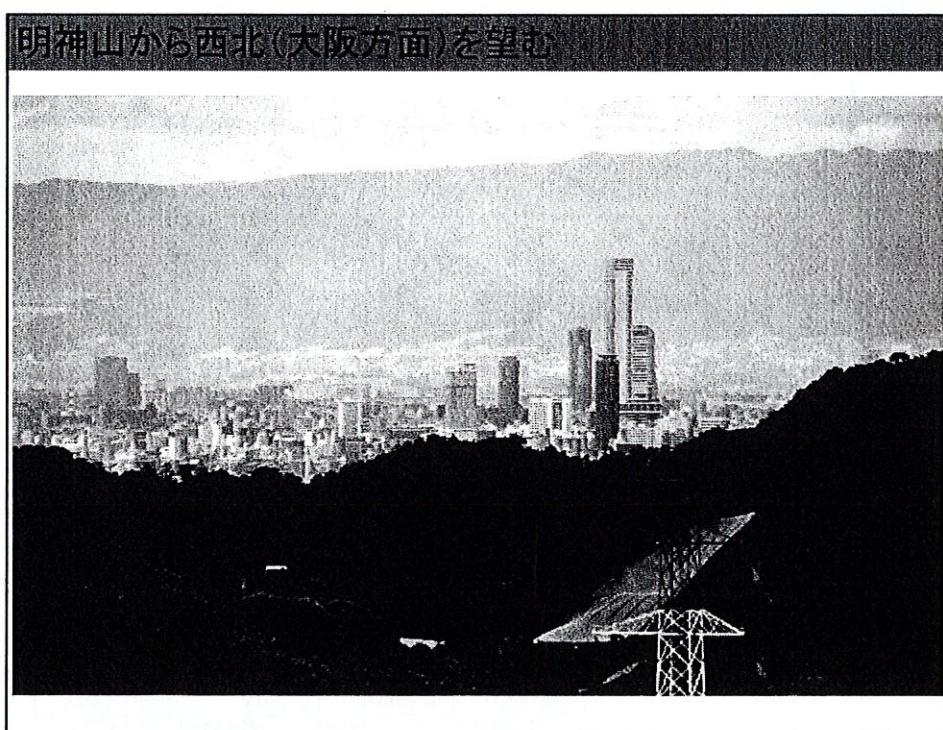
史書に名の出でる山城

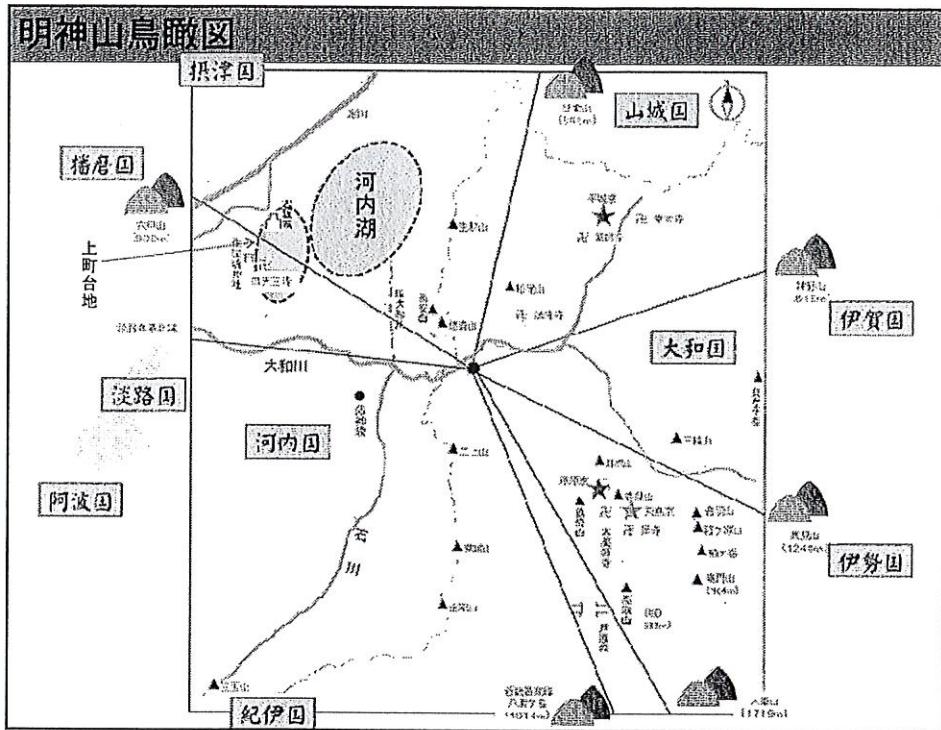
a 高安城	b 屋敷城	c 茨城	d 常城
e 長門城	f 大野城	g 基肄城	h 鞠智城
i 金田城			

史書に名の出でない山城

①永納山城	②城山城(坂出市)	③城山城(たつの市)	④大迫小迫山城
⑤鬼ノ城	⑥石城山神護石	⑦御所ケ谷神護石	⑧唐原神護石
⑨把木神護石	⑩高良山神護石	⑪女山神護石	⑫おっぽ山神護石
⑬帶隈山神護石	⑭雷山神護石	⑮阿志岐城	⑯麿馬神護石

出典：全国文化立国戦略文化財センター連絡協議会企画「280回後奈良天皇誕生日記念事業集『古代山城と城跡遺跡の現状』」

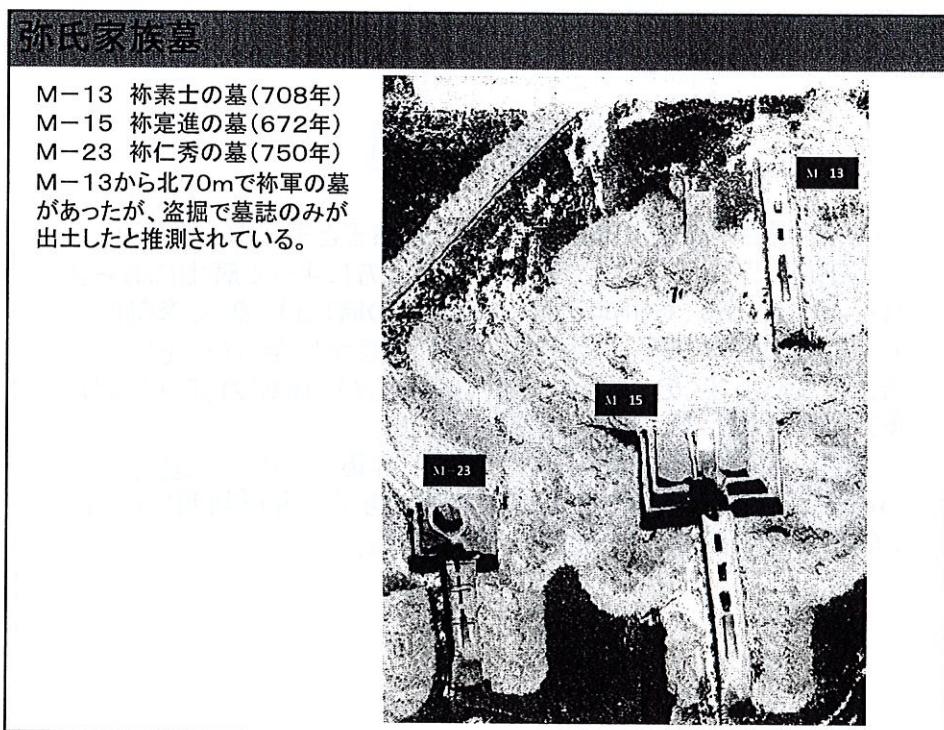
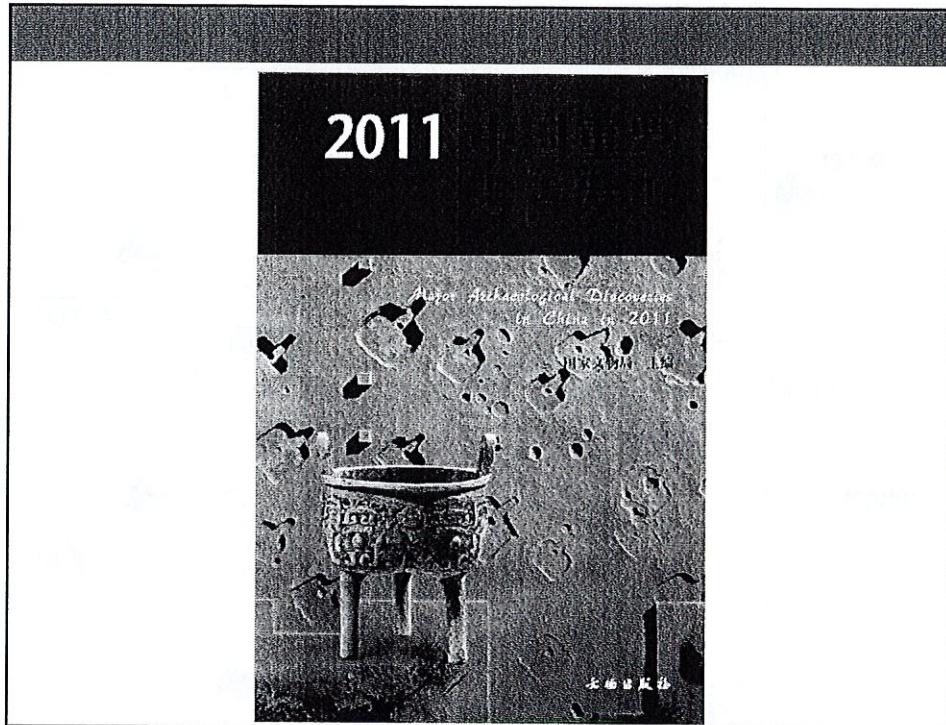


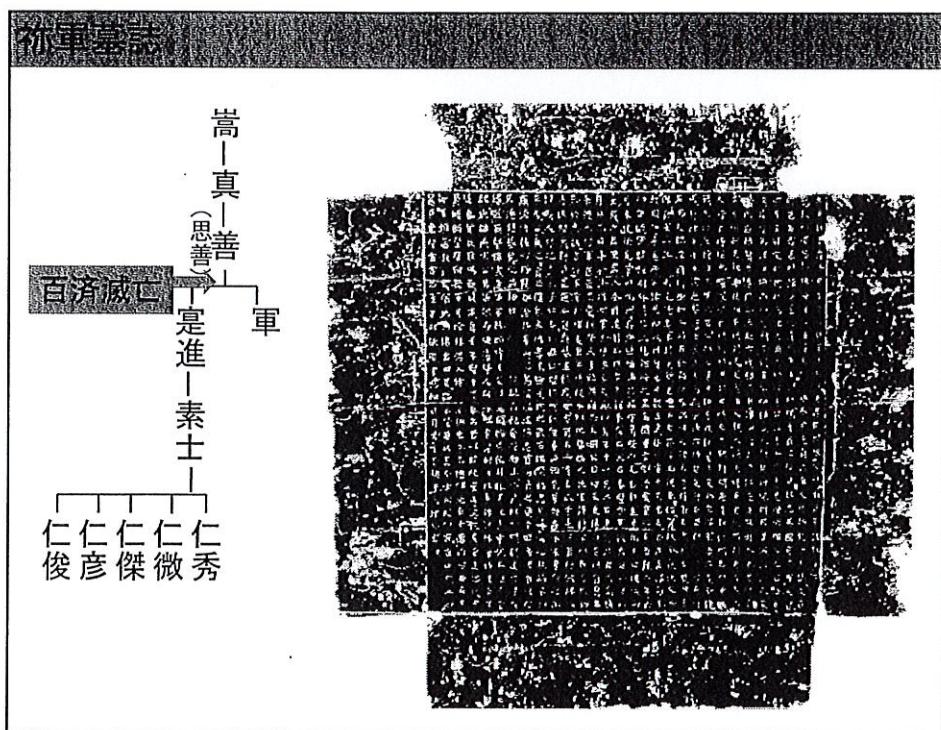
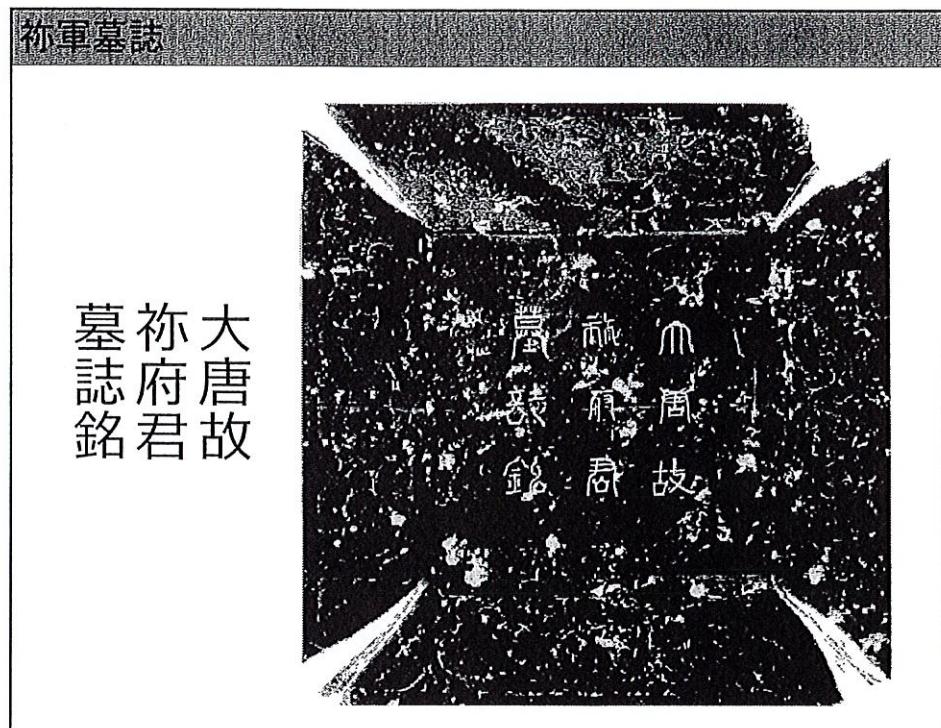


弥氏家族墓

660年百百濟成立の時に、百濟王義慈王と王子隆、大臣88人、百姓12万807人が、唐朝大将蘇定方によって唐土に渡らされた。同じように、668年と高句麗滅亡の時には、唐将李勣によって、宝蔵王、王子、大臣ら20万人が唐土に至った。そして、唐土に至った多くの、もとの王族や権臣らが、唐朝の官吏となり、多方面に活躍して、立派な墓誌を残した。

近年、陝西省西安市とその近郊で、彌軍と一族の墓誌などが(678)が盗掘され、その後の発掘調査で多くの事が判明してきた。その状況を中国での公開物から報告する。



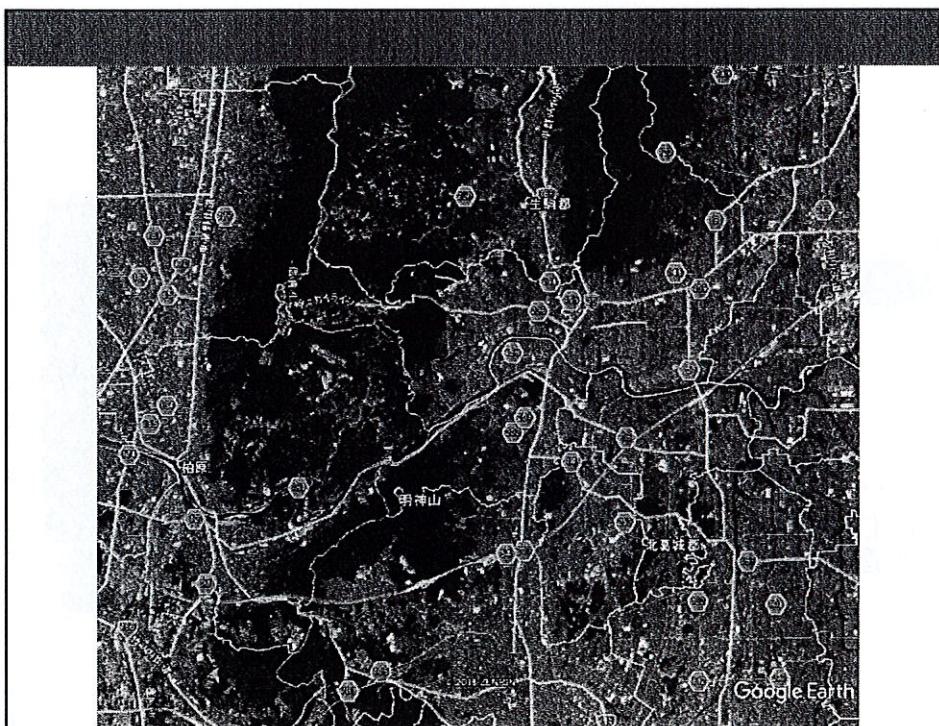


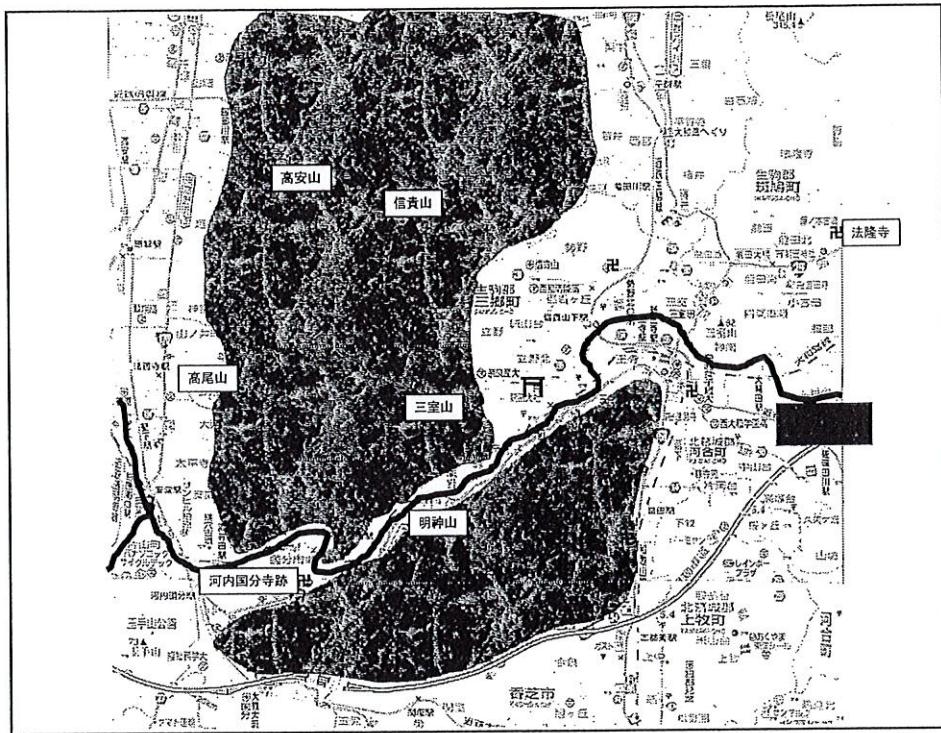
孙军墓志

大唐故右威卫将军上柱国孙公墓志铭并序

公讳军，字温，燕津属冀人也。其先与华同祖，永嘉末，避乱南走，因家京口。若夫巍巍泰山，跨清丘以东峙；森森绿水，临丹淮以南流。漫烟云以横炎，降之于渤海；照日月而映照，秀之于戴蔚；灵文邈邈，高首芳于七子；汗马雄武，惟后异于三韩；华伟增辉，英材耀响，惟固不地，英代有声。曾祖祖、祖善、父弟，皆是孝廉一品，官号佐平。并缘地又以光身，佩天爵而慰孤。患得铁石，操将松筠。范物者，道德有成。则士者，文采不殆。公猿鹤兼性，蓄领生姿。涯岸澄澈，裕光覆日。干斗升之逸气，芒照星中；挫半角之英风，影征云外。去显庆五年，官军平水渠日，见机识秀，杖剑知归，假由余之出丸，如金碑之入汉。圣上嘉叹，擢以荣班。授右武卫郎川府折冲都尉。子叶日本余晖，招扶桑以速降；风谷遗蛇，负孽槐而阻固。万骑豆野，与盈马以惊尘；千艘横浪，援原岐而纵舟。以公格谋拘左，龟镜漱东，侍在御帝，往尸招慰。公徇臣节而收命，慨宣华以致施。飞虬海之苍鷗，渴涣山之赤雀。块河晚而天吴静，塞风残而西云落浦。恨薨失俗，济不终夕。遂就说桥天威，喻以揭揭千秋。僧帝一旦辞臣，仍倾大首望效十人将入朝闻。仰蒙恩诏授右武卫郎将，少选迁右领军军中郎将兼右骁果府司马。材光子墨之足，仁副百城之心。早登冥台，葬标于光禄；慧月冲府，芳托于桂宫。衣锦昼行，宿贤无差。此藉夜寝，宇宙有方。玄成穿三年十一月廿一日诏授右威王将军。房廊形制，饰恭崇陛。墨裳荣晋，踝履便繁。方谓克壮清猷，永垂多祚。豈若噪驰易居，霜凋马陵之抑；川因难留，风惊龙潭之水。以仪凤三年岁在庚寅二月朔戊子十九日晨午道疾，薨于秦州长安县之延寿里第。春秋六十有六。且情念功惟旧，僚僚者久之，贈帛布三百匹，率三官升，兼奉所须，并令官船，仍使弘文馆学士兼检校本卫长史王行本监护。惟公雅识淹通，温仪韶峻，明珠不穢，白珪无玷。十步之芳兰，室钦其臭味；四邻之彩桂，岭尚其英华。乘塾扶裾之奠，遵柩连衽之哀。尊以其年十月甲申朔二日乙酉葬于秦州乾封县之高阳里，礼也。姻马悲鸣，九原长往。月轮夕驾，星精宵上。日落山兮草色寒，且度原兮接声响。梦文鹤兮可通，随武山兮安葬。伦清风之歇灭，树芳名於寿像。其词曰：

曾胤青丘，芳基华圃。厥远遐邈，会蓬时济。茂族淳源，奕叶相续。毓厥夙彰，隆恩无替。其一。惟公荀裔，桂馥兰芬。绪肇七贵，乃子传孙。流芳后代，播美床席。英声虽歇，令范犹存。其二。崩前惊伏，牒拘道幕。名将日远，德随时殊。惨松吟於夜风，悲薤歌於朝露。灵櫬今逮特，所移分期瞑。嗟陵谷之冥迁，覩音徵之靡轟。共三。





まどか

- ①高安城の範囲は、従前考えられていたものとは違っていたのではないか。
 - ②大和川を南北から監視する業務が最大の目的ではなかったのか。
 - ③河内国分寺跡は、もともと高安城の一部として何らかの施設であったのではないか(全国の国分寺の立地としては、甚だ異常であると思う)。
 - ④高安城の最大の施設は、川を監視し、監視のための軍営を三郷町側の高安山の頂上からも見えるあたりに設置していたのではないか。このため、倭国高安城と日本書紀に書かれたと思う。
 - ⑤その他